セントラル・パークの「野戦病院化」を予測した武士

平時のマンハッタンとセントラル・パーク
ギャラリーページへ

（柳原 三佳・ノンフィクション作家）

新型コロナウイルスの感染拡大が、世界各国で深刻化しています。

爆発的に感染者が増えたアメリカのニューヨークでは、すでにロックダウン（都市封鎖）が行われ、市民の憩いの場であるはずのセントラル・パークには、慈善団体「サマリタンズ・パース」によって、急遽、テントによる感染者用の臨時病院が開設されたそうです。

「ロイター」（2020.4.1）によれば、

『サマリタンズは、ハイチの地震やフィリピンのサイクロン発生時、イラクのモスル奪還時など、世界中で病院を開設し医療活動を行ってきた。この分野では多くの経験があるが、米国で臨時病院を開設することになるとは予想もしていなかったという』

とのことです。

（参考）https://headlines.yahoo.co.jp/hl?a=20200401-00010002-reutv-n_ame

動画によるレポートを見ると、公園内に白いテントがいくつも張られ、その状況は、まさに戦時下の「野戦病院」のようです。

臨時の野営病院が設置された現在のセントラル・パーク（2020年3月31日撮影。写真：AP/アフロ）
ギャラリーページへ

幕末、セントラル・パークを歩いた日本の遣米使節団

セントラル・パークは、ニューヨーク州・マンハッタン島の中央部に位置する全周約10kmの都市公園です。日比谷公園の21倍という広大な敷地内には、メトロポリタン美術館、セントラル・パーク動物園、回転木馬のほか、野球場やテニスコート、スケートリンクなどの運動施設もあり、ニューヨークを訪れた人なら誰もが一度はこの公園に足を踏み入れているのではないでしょうか。

セントラル・パークが正式にオープンしたのは、1873（明治6）年、今から147年前のことです。しかし、その15年前にはすでに整備工事が始まり、1860年にはほぼ現在の公園のかたちが整っていたようです。

実は、「開成をつくった男、佐野鼎（さのかなえ）」はこの年、幕府が派遣した「万延元年遣米使節」の随員として渡米し、ニューヨークにも数日間滞在していました。

そして、できたてほやほやのセントラル・パークの中もくまなく歩き、『訪米日記』の中にその様子を詳細に記していたのです。

1860年と言えば、日本は幕末。明治維新の8年前にあたります。この時期に、ちょん髷を結い、腰に刀を差した羽織袴姿のサムライたちが、ニューヨークを闊歩していたのですから、アメリカ人たちはさぞや驚きの目で彼らをみていたことでしょう。

しかし、それ以上に、アメリカの都市を目の当たりにした日本人使節たちのカルチャーショックは大きなものだったに違いありません。

江戸時代の日本には「公園」という概念がなかった？

1800年代、ニューヨークはアメリカの中でも金融や商業の中心都市として大変な発展を遂げ、人口が急増していました。

そんな中、ニューヨーク州の議会では、大都市の真ん中に、アメリカでは初となる人工的な緑地公園を作る案が出され、その後、法制化に至ったのです。

佐野鼎は、自身の『訪米日記』の中で、「セントラル・パーク」のことを「センテラル・パルク」と記載し、日本語としては『逍遥園（しょうようえん）』という言葉を当てています。

『逍遥（しょうよう）』とは、＜気ままにあちこちを歩き回ること。そぞろ歩き。散歩（デジタル大辞泉）＞の意味です。

江戸時代の日本には、まだ「公園」という概念がなかったのでしょう。佐野鼎は日記の中に、芝生が地面に敷き詰められた広場を見たときの素朴な驚きをこう記していました。

一部現代語に直しながら、抜粋してみます。

『広大な園有り、センテラル・パルクと名づく。四方二里（約8キロ）ばかり、原野一般に芝草を植え、青色染むるがごとし』

使節団の仲間と共に園内を歩きながら、各所に配置された色とりどりの花壇や人工的に作られたいくつもの山や川、湖（池）などを見学し、以下のように表現しています。

『林岳清く秀で、水碧く砂明らかに、複数の川はめぐり流れ、その風景愛すべし』

大都市の中の巨大な公園が担う真の役割

しかし、佐野鼎は、ただ「綺麗だ」「素晴らしい風景だ」という感動を記しているだけではありませんでした。

たとえば、セントラル・パークの中に作られた湖が、ニューヨークの街の「水道」の源泉として活用されていること、また、この場所がどのような経緯で、いくらくらいの費用をかけて作られたのか・・・、そのあたりについても、以下のようにしっかりとレポートしていました。

『中間に一湖あり、これ街中用水の源なり。（中略）十二年前、街中の者ともに会議し、一千万ドルラルの金を費やし、数千人を使役し、いばらを刈り払って道路を開き、珍しいかたちの橋を架し、種々の園を造りて花樹を植えたり。この地は必ず、合衆国中、無双の（ふたつとない）遊楽地となるべし』

また、セントラル・パークのような広大な公園がニューヨークの真ん中に作られた理由について、彼なりにこのような分析まで行っていたのです。

『合衆国には平常の住居に、泉水・築山等の庭園を設くることなし。礼拝日（七日ごとに休日あり。これ日曜日なり）の余暇または間隙あるときは、国中の人民、貧富貴賤を選ばず、ことごとく逍遥園に出て遊観す。以て衆と同じく楽しむ、の意を観るべし』

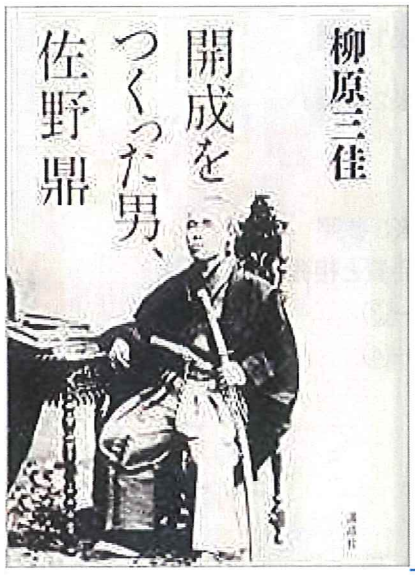
「アメリカの家には日本のような庭園を設けていないので、休日には身分に関係なく、こうした公園に出向いて皆で楽しんでいるのだろう」ということですね。

何より私が驚かされたのは、セントラル・パークを視察した佐野鼎が、この庭園を『逍遥園（散歩のための公園）』としてだけでなく、『有事の際の用地』として評価していたことです。

彼がセントラル・パークについて記したくだりの最後には、こんな一行が記されていました。

『事に臨みては、兵馬を屯聚（とんしゅう＝＊群がり集まること）するに必要の用地とす。これ逍遥園の設けられる所以なり』

つまり、万一の有事の際に、兵隊や馬、武器等を集める必要が生じたとき、こうした広場はその用地として活用することができる、ということでしょう。



『開成をつくった男、佐野鼎』（柳原三佳著、講談社）

ギャラリーページへ

佐野鼎がセントラル・パークを視察してから160年後の今、まさにその地は「逍遥園」としてではなく、新型コロナウイルスという「感染症」と闘うための「用地」として活用されています。

彼の慧眼に改めて驚きを感じているところです。

ちなみに、本連載で何度も触れているとおり、佐野鼎自身は明治10年に大流行したコレラに罹患し、49歳という若さで亡くなっています。

感染症はいつの時代も容赦なく人類に襲いかかります。大変厳しい状況ではありますが、一日も早い収束を願うばかりです。